

日本人英語学習者による 定冠詞 *the* の過剰使用について

伊 東 美 津

1. はじめに

日本語学習者の多くが、「は」と「が」の違いに苦しむというが、それと同じかそれ以上に日本人英語学習者にとって、冠詞の習得はこの上なく困難を極めると言えよう。たとえ何十年英語を勉強したとしても、冠詞の全貌を理解し完全に習得することはほぼ不可能である。それは、ピーターセン (1988: 7) が、日本人の英文エラーの中で、意思伝達上、大きな障害と思われるものを六つに大別し、その順序付けを行い、冠詞と数、*a*、*the*、複数、単数などの問題を最も深刻なものとして一番目に挙げていることからわかる。

日本人英語学習者の冠詞習得を困難にしている要因にはいくつかある。日本語の文法システムには、冠詞に相当する明示的文法項目が存在しないことや英語の名詞のような数の概念に基づく名詞の区別がないこともその一つである。たとえ母語にそれらに相当する文法項目がないとしても、統語論のみで処理できるのであれば、学習者が冠詞とは何かを理解し易いのであるが、冠詞の場合、統語的問題というよりむしろ大人の英語母語話者のものの見方、つまり、与えられた文脈や談話での認知の営みという難問と深く関わっていることが冠詞習得を至難の業にしていると言えよう。¹

さまざまな要因が複雑に絡み合う冠詞の意味の習得は容易ではないため、学習者は習得過程でエラー文を生成する。冠詞のエラーには、大きく分けると、

冠詞脱落と置き換えの二つのタイプがある。² 本稿では、置き換えタイプのエラーの中でも、特に、不定冠詞 *a* が生じる環境での定冠詞 *the* の過剰使用の問題を Ionin *et al* (2004, 2008) の枠組みを基に考察する。第2章では、Ionin *et al* (2004, 2008) の分析を概観し、その問題を解決するために提案された普遍文法の制約の妥当性を考える。第3章では、Ionin *et al* (2004, 2008) のように普遍文法に訴えることなく、母語の影響、つまり、日本語の談話構造の特質という観点から、不定冠詞 *a* の環境での定冠詞 *the* の過剰使用の問題を説明できることを示したい。

2. 先行研究の分析と問題点

2.1. 冠詞と名詞

定冠詞 *the* の過剰使用を論じる前に、冠詞習得を困難にしている要因の一つである名詞について本稿での立場を明らかにしたい。大人の英語母語話者が、名詞を使う場合、その名詞をどのように認識するかによって、ゼロ冠詞（冠詞を付けない場合）、不定冠詞 *a*、定冠詞 *the* のいずれかを選択する。その際、不定冠詞 *a* と定冠詞 *the* を区別する素性のほかに、冠詞と関わる名詞が、与えられた文脈において可算名詞か不可算名詞かの区別、さらに、可算名詞なら、それは、単数なのか、あるいは、複数なのかも考慮しなければならない。それゆえ、可算名詞と不可算名詞の区別の習得なしには、不定冠詞 *a* およびゼロ冠詞の習得は難しい。しかしながら、可算名詞と不可算名詞の習得は容易ではない。それは、日本語の文法システムにはそのような名詞の区別は存在しないからである。加えて、可算名詞か不可算名詞かの区別は、統語的に処理できる性質のものではなく、冠詞と同じように、母語話者の認知の仕方と関わっているという厄介な問題がここでも生じるからである。そのためか、日本人英語学習者は、ゼロ冠詞、不定冠詞 *a*、定冠詞 *the* の選択で迷った場合、定冠詞 *the* を頻繁に用いる傾向がある、ということが石田 (2002: 8) で指摘されてい

る。つまり、不定である名詞が可算名詞か否かが判然としない場合、それを回避するための学習者の戦略として、可算名詞と不可算名詞の区別と関係のない定冠詞 *the* の過剰使用が見みられるのである。³

このように冠詞習得には冠詞だけでは処理できない問題もあり、それらが複雑に絡み合い、結果として冠詞の習得を一層困難にしていると言えよう。それゆえ、複雑に絡み合っている問題を一つ一つ丁寧に取り出し、明らかにする必要がある。さもなければ、冠詞習得過程で観察されるエラーを分析し、その特徴を正確に記述し、説明することはできない。そこで、本稿では、まず、上述した名詞を区別する数の概念との関係から生じる冠詞の問題から離れ、最初に扱うべきは不定冠詞 *a* と定冠詞 *the* の本質的違いであると考え、そこから生じる問題の一つ、つまり、冠詞習得過程で数多く観察される不定冠詞 *a* の環境での定冠詞 *the* の過剰使用に焦点を当てる。その具体的な例は次の(1)のような場合である。以下の議論では、(1)のような例での定冠詞 *the* の過剰使用の問題を、Ionin *et al* (2004, 2008) の分析を基に検討する。

(1) Ionin *et al* (2004 : 23)

Roberta: Hi, William! It's nice to meet you again. I don't know that you are in Boston.

William: I am here for a week. *I am visiting (a,*the) friend from college-his name is Sam Brown, and he lives in Cambridge now.*

2.2 先行研究での分析

Parrish (1987)、Thomas (1989) は、与えられた文脈で用いられる名詞が不定冠詞 *a* と結びつくかそれとも定冠詞 *the* と結びつくかについて、〔±SR〕(specific referent 指示対象物が特定か否か) と〔±HR〕(assumed known to the hearer 聞き手に知られている否か) という二つの素性を基に名詞を分類している。さらに、提案された素性を使って学習者のエラー分析を行なっている。Parrish (1987) での被験者は、母語に冠詞のない日本人英語学習者で、Thomas

(1989) の場合は、母語に冠詞のない日本人英語学習者と中国人英語学習者である。大人の英語母語話者は、名詞の〔±HR〕に基づいて定冠詞 *the* の選択を行なうが、Parrish (1987) や Thomas (1989) でのそれぞれの英語学習者は定冠詞 *the* を〔+HR〕の素性でなく、〔+SR〕の素性を持つ環境と関連付け、〔+SR-HR〕の文脈で定冠詞 *the* を過剰使用することを指摘している。つまり、(1) の例文のように指示対象は特定だが、聞き手には知られていない〔+SR-HR〕場合に、目標言語では不定冠詞 *a* が要求される文脈であるにも拘らず、誤って定冠詞 *the* を過剰使用しているということである。高橋 (2010: 17) が述べているように、〔±SR〕の区別は英語母語話者でも困難なことが多いという問題はあるが、大人の英語母語話者と母語に冠詞のシステムを欠く英語学習者とは、定冠詞 *the* の選択に関与する素性が異なるという指摘は、その後の冠詞習得研究に影響を与えている。Ionin *et al* (2004, 2008) では、不定冠詞 *a* と定冠詞 *the* を区別する明示的な素性とその素性に関わる仮説を提案し、それに基づいて定冠詞 *the* の過剰使用の問題を扱っている。次に、Ionin *et al* (2004, 2008) の提案を概観する。

Ionin *et al* (2004) は、被験者として母語に冠詞システムがないロシア人英語学習者と韓国人英語学習者に対して行なった実験結果として、Parrish (1987)、Thomas (1989) と同様の問題を指摘している。さらに、Ionin *et al* (2004) は、被験者の冠詞のエラーについて、それらが母語の転移や入力となる言語情報に影響を受けたのであれば、ランダムなものになるかもしれないが、実験の中で観察された冠詞のエラーはランダムなものでなく、体系的であると述べている。この体系的性に対して穏当な説明を与えるために、Ionin *et al* (2004) は、以下の(2) **Definiteness and Specificity** (定性と特定性)、(3) **The Article Choice Parameter** (冠詞選択パラメータ)、(4) **The Fluctuation Hypothesis** (変動仮説) を提案している。⁴

Ionin *et al* (2004) は、まず、冠詞選択に関わる素性に関して(2) **Definiteness and Specificity** (定性と特定性) を導入し、Parrish (1987) や Thomas (1989)

より明示的な定義を与えた〔±specific〕と〔±definite〕に基づいて名詞（句）を分類している。〔+specific〕と〔+definite〕の素生の定義は、以下の通りである Ionin *et al* (2004:5)。

(2) Definiteness and Specificity

If a Determiner Phrase (DP) of the form [D NP] is

- a. 〔+definite〕, then the speaker and hearer presuppose the existence of a unique individual in the set denoted by the NP.
- b. 〔+specific〕, then the speaker intends to refer to a unique individual in the set denoted by the NP and considers this individual to possess some noteworthy property.

(2a)の〔+definite〕は、話し手と聞き手の両者が、前提として名詞（句）で示された対象を唯一の存在として同定できるということを、一方、(2b)の〔+specific〕は、話し手が名詞（句）で示された対象を唯一のものとし、それは注目すべきものであると見做しているということを定義している。

被験者に見られる冠詞エラーは、ランダムなものでなく体系的であることから、生成文法の枠組みでの母語習得が普遍文法の制約を前提としているように、第二言語の冠詞習得でも普遍文法が働く想定している。普遍文法には、冠詞の語彙指定において、パラメータの変異があり、冠詞の選択を統率するパラメータには(2)の定性 (definiteness) と特定性 (specificity) の二つがあるとしている。さらに、そのパラメータに関して、次の The Article Choice Parameter (冠詞選択パラメータ) を提案している Ionin *et al* (2004:12)。

(3) The Article Choice Parameter (for two-article languages)

A language that has two articles distinguishes them as follow:

The Definiteness Setting: Articles are distinguished on the basis of definiteness.

The Specificity Setting: Articles are distinguished on the basis of specificity.

(3)の冠詞選択パラメータは、二つの冠詞を持つ言語の冠詞選択に、二つの可能なパターンを予測する。英語では、定性 (definiteness) に基づいて、定冠詞 *the* と不定冠詞 *a* は区別されるので、定冠詞 *the* は [+definite] の文脈で、不定冠詞 *a* は [-definite] の文脈で用いられる。従って、英語の冠詞の選択では、特定性 (specificity) は関与しない。特定性 (specificity) に基づいて、冠詞選択を行なう言語には、サモア語がある。サモア語では、[+specific] の文脈では *le* が、[-specific] の文脈では *se* が用いられ、英語のように定性 (definiteness) で冠詞を選択することはない。

Ionin *et al* (2004: 16) では、(3)の冠詞選択パラメータに加えて、英語学習者の普遍文法へのアクセスを説明するために、さらに The Fluctuation Hypothesis (変動仮説) が提案されている。

(4) The Fluctuation Hypothesis for L2 English article choice:

- a. L2 learners have full access to UG principles and parameter-settings.
- b. L2 learners fluctuate between different parameter-settings until the input leads them to set the parameter to the appropriate value.

(4)の仮説により、英語学習者の文法は、普遍文法に制約されることになるので、英語学習者のエラーはランダムなものではなく、そのエラーは可能な普遍文法のパラメータの設定を反映しているものとなる。つまり、学習者が、英語の冠詞のパラメータの選択を、特定性 (specificity) である設定すると、[+specific] のとき定冠詞 *the* を [-specific] のとき不定冠詞 *a* を予測する。従って、[-definite] であっても定冠詞 *the* を、[+definite] であっても不定冠詞 *a* を使用するというエラーが生じることになる。(3)の冠詞選択パラメータの仮説だけでは習得が難しく、(4)の変動仮説が共に働いて学習者を冠詞習得へと導く。

換言すれば、(4)の仮説の下、目標言語の入力となる言語情報が英語の冠詞のパラメータは定性 (definiteness) であることを学習者に気付かせるまで、可能なパラメータ間で変動しながら、つまり、さまざまな中間文法を形成しながら目標言語に近づいていくと考えられている。このように、Ionin *et al* (2004) で提案された(2)(3)(4)は冠詞エラーの体系性について、穏当な説明を与えることを可能にする。実際、Ionin *et al* (2004) での実験結果は、提案された仮説の予測通りとなっている (Ionin *et al* (2004 : 30))。

(5) L1 Russian Speakers	[+definite]	[−definite]
[+specific]	79% <i>the</i> 8% <i>a</i>	36% <i>the</i> 54% <i>a</i>
[−specific]	57% <i>the</i> 33% <i>a</i>	7% <i>the</i> 84% <i>a</i>
(6) L1 Korean Speakers	[+definite]	[−definite]
[+specific]	88% <i>the</i> 4% <i>a</i>	22% <i>the</i> 77% <i>a</i>
[−specific]	80% <i>the</i> 14% <i>a</i>	4% <i>the</i> 93% <i>a</i>

(5)(6)から、ロシア人英語学習者より韓国人英語学習者のほうが、冠詞の選択に関して正確であるという違いはあるが、[+specific] [−definite] の場合に定冠詞 *the* の過剰使用が見られ、[−specific] [+definite] の場合に、不定冠詞 *a* の過剰使用が見られる傾向があると言える。これらの英語学習者の冠詞のエラーの体系性は、学習者が普遍文法にアクセスし、英語の定冠詞 *the* を定性 (definiteness) ではなく特定性 (specificity) のパラメータと関連付けていることによるものである。このことは、これらの学習者が、母語習得だけでなく第二言語習得でも、普遍文法の制約を受けているという証拠となるものであり、学習者の母語の転移によるものではないと Ionin *et al* (2004) は結論付けている。Ionin *et al* (2004) の枠組みでは、普遍文法へのアクセスを想定しない限り、母語に冠詞システムが無い英語学習者のエラーの体系性は説明できない。

上述したように Ionin *et al* (2004) は、母語に冠詞の無いロシア人英語学習者と韓国英語学習者に観察されるエラーの体系的に基づいて、冠詞習得には普遍文法が働き母語の影響はないと考えている。Ionin *et al* (2008) では、母語に冠詞のあるスペイン人英語学習者と母語に冠詞を欠くロシア人英語学習者を対象に、冠詞習得の比較を行い、さらに、その違いを論じている。ロシア人英語学習者については、Ionin *et al* (2004) 同様、[+specific] [-definite] で *the* を、[-specific] [+definite] で *a* を過剰使用し、普遍文法の二つのパラメータである定性 (definiteness) と特定性 (specificity) の間での変動がある。一方、母語に冠詞システムを持つスペイン人英語学習者には、そのような定冠詞 *the* の過剰使用パターンはなく、かなりの精度の高さで英語の冠詞を使い分けられていることが報告されている。つまり、スペイン語の冠詞は英語と同じく、定性 (definiteness) に基づいて区別されるので、もう一つのパラメータである特定性 (specificity) に影響されることはない。母語に冠詞があるスペイン人英語学習者の場合は、母語の冠詞の意味を英語に転移させることで、英語の冠詞のパラメータである定性 (definiteness) に基づいて正しく英語の冠詞を使い分けられているのである。スペイン人英語学習者には、ロシア人英語学習者にはない冠詞のエラーがある。そのエラーは、スペイン語の冠詞の使い方の影響を受けたものであり、このことも母語に冠詞がある英語学習者の場合、母語の転移が認められることを示している。

従って、英語の冠詞習得には、普遍文法が働くタイプと母語の転移が関与するタイプの二通りがあることになる。前者の場合、母語からの転移が不在のため、普遍文法にアクセスし、冠詞指定のための可能なパラメータを英語冠詞習得の過程で用いる。入力となるデータだけでは、学習者はすぐには英語の冠詞指定のためのパラメータ設定を行うことはできず、仮説(4)が予測するように、二つのパラメータの間で変動を繰り返す。このパラメータ間での変動は入力となる言語情報が学習者に英語の冠詞指定の素性は定性 (definiteness) であると気付かせるまで続くことになる。一方、後者の場合、普遍文法の制約は受けず、

母語の転移により習得する。このことから、冠詞習得は入力言語資料からのみ演繹的になされるものではなく、母語の転移、普遍文法へのアクセスなしには成し遂げられないと Ionin *et al* (2004, 2008) は主張している。

Ionin *et al* (2004, 2008) で観察されたエラーの特徴は、日本人英語学習にも当てはまる。すでに言及した Parrish (1987) や Thomas (1989) だけでなく、石田 (2002)、原田 (2000)、遊左 (2007) でも、特定性を基準とした定冠詞のエラーが多いことが指摘されている。⁵ Ionin *et al* (2004, 2008) は日本人英語学習者を分析対象とはしていないが、ロシア人英語学習者や韓国人英語学習者と同じように、日本人英語学習者にも母語に冠詞システムがない。また、普遍文法の存在を前提とする生成文法に基づく Ionin *et al* (2004, 2008) の枠組みでは、日本人英語学習者のエラーも同じように処理できるのは明らかである。従って、以下の議論では、日本人英語学習者もロシア人英語学習者や韓国人英語学習者と同じ分析を受けるものと見做すことにする。

2.3. 問題点

Ionin *et al* (2004, 2008) の枠組みは、普遍文法へのアクセスを想定することで、母語に冠詞システムがない英語学習者のエラーに観察される定性 (definiteness) と特定性 (specificity) という二つの素性の存在とエラーの体系性を説明している。しかしながら、母語に冠詞がなければ、母語からの影響を全く受けず、普遍文法と目標言語の入力トリガーとなる言語情報だけで冠詞が習得されるとは考えにくい。

水野 (2000: 74-75, 177) は、一般的に言語転移は形態的、あるいは統語的領域よりも、意味的・語用論的領域に広く見られるとし、それゆえ、母語と目標言語の意味的な隔たりによって生じるエラーは、日本語を母語とする成人英語学習者の中間言語内に最も長くとどまり、母語の意味的・語用論的制約が中級や上級レベルでドミナントに作用することを観察している。また、和泉・伊佐原 (2004: 138) は、日本人英語学習者のコーパスデータから、日本人英

語学習者にはすべてのレベルで冠詞の脱落が一番多く見られ、これは学習者がまず発話内容を母語で組み立て、それを目標言語に翻訳し出力することが多いためとしている。冠詞脱落に関しては、また、水野（2000：177）も、母語に冠詞システムがない第二言語の学習者は、上級者であっても、特に、コミュニケーションの場では、冠詞を省くことを指摘している。このような習得過程で長期にわたって見られる冠詞の脱落は、母語習得には見られない現象である。⁶

さらに、遊左（2007：244）は、冠詞の省略は、母語に冠詞を持たない言語の英語学習者の方が、冠詞を有する言語を母語とする英語学習者より、頻度が高いとしている。以上のことから、冠詞習得での母語の転移は明らかであり、たとえ、母語に冠詞システムが存在しない英語学習者であっても母語の影響を受けると言えよう。

生成文法では、言い間違いなどを含む不完全な入力となる言語資料にさらされているのにも拘らず、子どもは完全に母語を習得することから、人には生得的に普遍文法が備わっていると考えられている。つまり、普遍文法の存在を認めない限り、母語習得は不可能なのである。母語習得と同じように、第二言語習得でも普遍文法の制約を受けるとする Ionin *et al*（2004, 2008）の主張では、学習者はパラメータ間での変動を繰り返しながら、最終的には、目標言語の大人の母語話者と同じ冠詞の文法を獲得するはずである。しかしながら、小泉（1989：191）は、第二言語学習者としての経験から、たとえ英語が母語でない人が流暢であっても、冠詞や複数形だけは、子守歌を聞きながら育った人でないとわからない、と絶望的に述べている。原田（2000）も、時間をかけてもネイティブのレベルに近づけない冠詞の難しさを述べている。⁷ また、石田（2000：10）、バトラー後藤（2005：5）では、不正確な言語表現が固定化してしまったことをいう化石化（fossilization）の現象が冠詞の習得過程で生じていることが報告されている。母語習得と同じように、第二言語習得においても、普遍文法が働いていると想定するであれば、上述のような長期にわたる冠詞の脱落、習得の困難さ、化石化などの現象は起こらないはずである。しかし

ながら、実際の言語習得では、冠詞研究で報告されている通りである。それゆえ、生得的に備わった普遍文法の制約を受け、子どもが母語を習得するように、第二言語習得でも普遍文法が働く想定する Ionin *et al* (2004, 2008) の提案は、普遍文法の制約を受けているのにもかかわらず、完全習得が困難であるという事実からも妥当であるとは言えない。

第二言語習得の場合、水野 (2000:177) が示唆しているように、母語と関連付けながら目標言語について言語上の事実とコミュニケーション上の事実を意識的に注目し、理解することによって不確実性を減らしながら習得していくのではないだろうか。換言すれば、冠詞習得の場合、母語に優勢である特定性 (specificity) の概念に基づく冠詞の使用から、繰り返される冠詞の指導や入力となる言語情報などからしだいに英語特有の定性 (definiteness) というものの見方に気付き、それに対して意識的理解を行い、母語の転移と考えられる特定性 (specificity) と意識的に理解しようとする英語の定性 (definiteness) との間で変動しながら習得していくと考えたほうが妥当であると思われる。

Ionin *et al* (2004, 2008) の提案のように普遍文法の制約を想定しないのであれば、母語に冠詞のない言語の英語学習者が、母語の転移により、いかにして特定性 (specificity) に基づく冠詞分析を行なうのかという新たな疑問が生じる。次章では、日本人英語学習者が、日本語の中のどのような要因をもとに特定性 (specificity) という概念を英語の冠詞と関連付けるのかを考察し、それは韓国人英語学習者にも当てはまることを指摘したい。このことにより、Ionin *et al* (2004, 2008) の提案である普遍文法へのアクセスを想定しなくても、Ionin *et al* (2004, 2008) が指摘したエラーの体系性をきれいに説明できることも併せて示したい。

3. 日本語の談話構造

Ionin *et al* (2004, 2008) の枠組みでは、冠詞習得でも普遍文法の制約を受けるため、英語学習者が特定性 (specificity) の素性を選択する可能性が与えられている。しかしながら、前章で、子どもの母語習得過程と第二言語習得での冠詞習得過程はまったく同じではないことから、第二言語習得での普遍文法へのアクセスは妥当性を欠くと論じた。普遍文法が関与しないとなると、学習者はどのようにして特定性 (specificity) という概念を獲得するのか、ということ明らかにしなければならない。日本語の文法システムには、サモア語のように特定性 (specificity) を基準とする冠詞が存在しないため、学習者は特定性 (specificity) という素性を用いることはできない。それにも拘らず、日本語の英語学習者は、特定性 (specificity) に基づいて英語冠詞を用い、先行研究で観察されたように定冠詞 *the* の過剰使用というエラーを生成する。⁶ この問題を考える上で、池上 (2006, 2007) の日本語の談話構造の分析は、示唆に富むものであり、以下の議論では、池上 (2006, 2007) の提案を基に、これまで論じてきた不定冠詞 *a* の環境での定冠詞 *the* の過剰使用の問題を考察する。

池上 (2006, 2007) は、英語と日本語の談話構造に関して興味深い指摘を行なっている。池上 (2007: 276) によれば、聞き手にとって復元可能というのは話し手と聞き手がいて、その間で、対話が進められるような場合に典型的に前提として働く原則である。これに対して、話し手にとって復元可能というのは、話し手だけの独白の場合に働く原則と考えることができるとし、日本語の談話には本来独白を特徴付けるはずの原則に基づくと思われる振る舞いがかたかれ少なかれ入り込む傾向があり、しかも、それがかなり許容されるとしている。英語は、前者、つまり、聞き手にとって復元可能な言語であり、日本語は、後者の話し手にとって復元可能な言語となる。もし、話し手が話し手にとって復元可能という原則だけに従うならなら、日本語のような言語ではコミュニ

ケーションが成り立たないことになるが、実際はそうではない。このことから、話し手復元可能と聞き手復元可能という区別を補完するものとして、池上(2006:233-234, 2007:284)は、Hinds(1987)の談話における話し手責任と聞き手責任という区別を導入している。Hinds(1987)によれば、コミュニケーションの成功ということに関して、話し手のほうに主な責任があるとするのが話し手責任で、聞き手のほうに主な責任があるとするのが聞き手責任ということで、どちらに多く傾くかという観点から、言語社会を典型的に分けることができるということである。この分類では、英語は話し手責任という類型に属する言語であり、日本語は聞き手責任という類型に属する言語であるとされる。Hinds(1987)によれば、聞き手責任を強調する類型の文化としては、日本語の他に、韓国語や古代中国語がそうである、ということである(池上(2007:285))。

上述した原則から、日本語のコミュニケーションは、話し手にとって復元可能と聞き手責任という要因で成り立ち、一方、英語では聞き手にとって復元可能と話し手責任という要因で成り立っていることになる。このような談話構造の違い、つまり、日本語における話し手にとって復元可能と聞き手責任という話し手中心の談話構造と英語における聞き手にとって復元可能と話し手責任という聞き手中心の談話構造の違いが、なぜ日本人英語学習者が特定性(specificity)に基づいて英語の冠詞の意味を捉える傾向にあるかをきれいに説明してくれる。

池上(2006, 2007)の分析から、日本語の談話構造の特質は、話し手にとって復元可能で聞き手責任であるということがわかる。話し手の談話に対するこのような態度は、話し手本人が従事している談話の中で、自分の言っていることは聞き手である相手にもわかるはずであるという理解となり、その談話の中で用いられた指示対象を聞き手である相手が同定できるか否かに関して話し手は頓着しないということになる。第2章で紹介した Ionin *et al* (2004, 2008)の定性(definiteness)についての定義(2)では、名詞(句)が定性(definiteness)

であるのは、話し手と聞き手が指示対象を唯一的に同定できること前提として
いる場合であった。しかしながら、すでに言及したように、日本語の談話構造
は、英語の冠詞の意味である定性 (definiteness) を特徴付ける視点、つまり、
文脈や談話において、聞き手が指示対象を同定できるか否かに関する視点では
なく、話し手中心の視点に基づいて展開される。このように、日本語の談話構
造においては、英語の談話構造を特徴付ける聞き手にとって復元可能と話し手
の責任という原則がないため、日本人英語学習者にとっては英語の定性 (defi-
niteness) の概念がわかりづらい。⁹ その結果、話し手にとって復元可能と聞
き手責任という日本語の談話構造で働く原則から導き出される特定性 (specifi-
city) の概念で英語の定冠詞を理解することになり、不定冠詞 *a* の環境での定
冠 *the* の過剰使用という問題が生じるのである。

以上の議論から、母語における冠詞システムの有無に関わらず、英語の冠詞
習得では母語の転移が見られると結論付けることができる。母語の転移を認め
ることによって、前章で指摘した冠詞脱落の問題も母語の転移という観点から
統一的に処理できる。さらに、特定性 (specificity) という概念は母語の談話
構造から学習者が抽出できるので、特定性 (specificity) に基づく冠詞のエラー
の体系性も、普遍文法の制約を想定することなく説明可能となる。

日本語は話し手中心の言語であり、日本語におけるこのような特質が、聞き
手中心の定性 (definiteness) に基づく英語冠詞を理解するのを困難にしている
と言えよう。日本語人英語学習にとって、いわば骨の髄までしみ込んだといえ
る、話し手にとって復元可能と聞き手責任という談話構造が、英語冠詞の習得
に影響を与え、つまり、負の転移となり、日本語の談話構造に優勢な特定性
(specificity) に基づいて、英語冠詞の意味の理解をしているのである。この
ような日本語の談話構造の影響が大きいため、聞き手が同定しているのか否か
に基づく英語定冠詞の意味の習得を阻み、水野 (2000) が指摘しているよう
に、母語と目標言語の意味的な隔たりによって生じるエラーは、日本語を母語
とする成人英語学習者の中間言語内に最も長くとどまり、母語の意味的・語用

論的制約が中級や上級レベルでドミナントに作用することとなる。それゆえ、習得段階で、適切な指導や言語資料が与えられなければ、石田 (2002)、バトラー後藤 (3005) が指摘した化石化の現象を生じることになる。

池上 (2006、2007) で引用されている Hinds (1987) によれば、韓国語も日本語と同じ話し手にとって復元可能と聞き手責任の言語であるので、日本人英語学習者のように韓国語の談話構造の特質が英語の冠詞習得過程で冠詞の意味理解に影響を与えとも言える。ロシア語に関しては、言語類型論的考察が必要であるが、日本人英語学習者や韓国人英語学習者と同じように、特定性 (specificity) に基づく冠詞の使用は普遍文法へのアクセスではなく、母語の影響から説明できるのではないと思われる。

4. おわりに

冠詞習得過程で観察されるさまざまなエラーの中で、本稿では、特に、不定冠詞 *a* の環境で見られる定冠詞 *the* の過剰使用の問題を論じた。Ionin *et al* (2004, 2008) は、このタイプの定冠詞 *the* の過剰使用とそこで見られるエラーの体系的性を説明するために普遍文法の働きを想定している。これに対して、本稿では、意味的・語用論的側面における母語の影響、上級者のエラーにも観察される冠詞の脱落、習得の困難さ、化石化の現象などから、母語に冠詞システムがないとしても、冠詞習得過程における母語の転移は明らかであり、普遍文法の制約は関与しないことを論じた。さらに、池上 (2006、2007) で提案された日本語の談話構造の特質を基に、日本人英語学習者の特定性 (specificity) に基づく定冠詞 *the* の過剰使用の検討を行い、その現象は、話し手にとって復元可能性と聞き手責任という日本語の談話構造に優勢である話し手中心の特定性 (specificity) という概念を、英語の冠詞が使われる文脈や談話に適用していることによるものであると結論付けた。このような談話構造は韓国語にも見られるため韓国人英語学習者も日本人英語学習者と同じように韓国語の談話構造

の特質に基づいて英語の冠詞の意味を分析していると考えられる。

日本人英語学習者や韓国人英語学者の場合、母語の中に特定性 (specificity) を基に談話を展開する要素があるため、Ionin *et al* (2004, 2008) のように普遍文法の働きを想定しなくてもエラーの体系性を説明できることも示した。認知の営み関わる冠詞の習得は、水野 (2000) の指摘にもあるように、母語の影響を受けるものであり、それを考慮することなしに、学習者の中間文法をより正確に記述することはできないのではないかと思われる。

注

- 1 この難しさのためか、冠詞だけに焦点をあてた指導はあまりなされていない、という英語教育の問題もある (松浦 (1988: 22))。つまり、これまでの英語教育では照応関係に基づく冠詞の用法と冠詞を伴う個別の表現を主に扱い、冠詞とは何かについてきちんと取り上げられてこなかったことも冠詞の習得を困難にしている要因である。別の英語教育の問題点として、石田 (2002) では、冠詞の使い方が間違っても大体相手に伝わるため、冠詞についての細かい指導より、コミュニケーションの方を重視する立場の影響も指摘されている。
- 2 エラーの二つのタイプは、さらに、下位区分される。冠詞のエラーの種類、分類の仕方、名称などは、研究者により異なる。例えば、原田 (2000) では、*a* の代わりにゼロ冠詞 (冠詞を付けない) の誤用、*a* の代わりに *the* の誤用、*the* の代わりに *a* の誤用、*the* の代わりにゼロ冠詞の誤用、ゼロ冠詞の代わりに *a* の誤用、ゼロ冠詞の代わりに *the* の誤用などに分類されている。また、純粋に統語的問題から生じる人称代名詞との語順のエラーもある。エラーの分類に関する詳細は、原田 (2000)、水野 (2000)、高橋 (2010)、高見 (1982) を参照。
- 3 和泉・伊佐原 (2004: 135) でも、理解不十分な規則の使用回避のための学習者の戦略について言及されている。
- 4 ここでの仮説の日本語訳は平川 (2011) を採用。
- 5 石田 (2002: 177-183) では、特定性という用語がきちんと定義された上で使われることがあまりないため、しばしば定性と混同され、特定の非特定のかで定冠詞 *the* と不定冠詞 *a* を使い分けてしまう誤りがかなり見受けられること指摘している。原田 (2000) でも、同様のことが指摘されている。原田 (2000: 13) は、特定の意味の不定冠詞 *a* が例外的な扱いを受けていることに気づき、

さらに、日本人の論文集を調べた結果として、冠詞の用法の誤用は非常に少なくなっているのにも拘らず、特定で不定の場合に定冠詞 *the* の使用がかなり見られたことを指摘している。原田 (2000: 174) では、情報の送り手にとって特定で、受け手にとって不定の名詞に *the* をつけやすいとして、次のような例を挙げている。論文の実験の冒頭に出てくる文章で、読み手には不定であっても書き手にとっては特定であるため、誤って定冠詞 *the* が使われている例である。

(1) *The specimen of 20 mm in diameter and 5 mm indiameter and 5 mm in thickness was hot pressed at 1650-1700 °C.*

(2) *The strong emission was observed in the sodium silicate glass.*

- 6 池上 (2007: 140) は第一言語習得における数の習得過程に関して、次のように述べている。一般に二歳過ぎの頃まではすべての名詞を不可算であるかのごとく、つまり、複数形を使うべきところも含めて常に単数形のまま用いる傾向がある。その後、複数形をとりうる可算名詞ととらない不可算名詞があることが習得されていくが、五歳から六歳過ぎの段階では、可算名詞か不可算名詞かのどちらの型の名詞であるかは、個々の名詞によって決まっている。つまり、ある名詞は常に単数形でのみ用いられ、他のある名詞は単数、複数のいずれもの形で用いられるかのような使い方が見られるという。そして、次に、大抵の名詞は実際にはコンテクストによって、どちらの型の名詞として用いることができるということが理解され、そのような使い方が定着してくるのであるが、それは、8歳以降ということである。このように普遍文法が働く母語習得では、習得が進むにつれ数の概念に基づく冠詞の脱落は見られなくなるのである。
- 7 織田 (2002, 2007) をはじめ、冠詞研究のほとんどの文献でこれまでも同様の指摘がなされている。
- 8 Ionin *et al* (2004, 2008) の枠組みでは、[+specific] [-definite] の場合に *the* の過剰使用が見られ、[-specific] [+definite] の場合に、*a* の過剰使用が見られることを予測するが、二つの過剰使用のうちどちらがより優勢であるかは予測できない。和泉・伊佐原 (2004) は、コーパスに付与されている学習者の3段階習熟度別の冠詞エラーの出現傾向の分析を行なった結果、すべてのレベルで、不定冠詞 *a* より定冠詞 *the* の過剰使用が顕著となっていることを報告している。このアンバランス、つまり、[+specific] [-definite] の場合における *the* の過剰使用のほうが圧倒的に多い理由として、小泉 (1989: 191) が述べているように、我々は、大抵の場合ある特定の文脈で話している、ということによるものと考えることができる。これに関しては今後詳細に分析する必要がある。
- 9 次の英文では、新情報の名詞には、不定冠詞 *a* が付加され、旧情報の名詞に

は定冠詞 *the* が付加されている。日本語では、定冠詞 *a* と不定冠詞 *the* のこのような違いは、新情報を「が」で、旧情報を「は」によって表すことができるため、不定冠詞 *a* を「が」と、定冠詞 *the* を「は」と関連付ける分析もある (Chaudron (1990:46))。新情報・旧情報に基づく分析では、下の例文のような前方照応の場合についてはうまく説明できるが、日本語の格助詞「が」と「は」にはさまざまな用法があり、そのすべてが英語の冠詞の意味と対応しているわけではない。

Once upon a time there lived an old man and his wife who were very poor.

One morning, the old man was walking through the forest.

参考文献

- バトラー後藤裕子 (2005)『日本語の小学校英語を考える—アジアの視点と提言』三省堂、東京。
- Chaudron, C. & Parker, K. (1990) "Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases," *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-63.
- Conner, U. & Kaplan, R.B.eds (1987) *Writing across Languages: Analysis of L2 Text*, Reading MA.
- 原田豊太郎 (2000)『例文詳解 技術英語の冠詞活用入門』日本工業新聞社、東京。
- Hinds, J. (1987) "Reader versus Writer Responsibility: A New Typology," in Conner and Kaplan, eds (1987).
- 平川真規子 (2011)『生成文法に基づく SLA 研究』【第二言語習得—SLA 研究と外国語教育】98-108、大修館書店、東京。
- 池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』、日本放送協会、東京。
- 池上嘉彦 (2007)『日本語と日本語論』筑摩書房、東京。
- Ionin, T., Ko, H. & Wexler, K. (2004) "Article semantics, in L2 acquisition: The role of specificity," *Language Acquisition* 12, 3-69.
- Ionin, T., Zubizarreta, M.L. & Maldonado, S. (2008) "Sources of linguistic knowledge in the second language acquisition of English articles," *Lingua* 118, 554-576.
- 石田秀雄 (2002)『わかりやすい冠詞講義』大修館書店、東京。
- 和泉絵美・伊佐原均 (2004)『日本人英語学習者の英語冠詞習得傾向の分析』【日本人1200人の英語スピーキングコーパス】131-139、アルク、東京。
- 小泉賢吉郎 (1989)『英語の中の複数と冠詞—日本人は本当に英語を理解しているか』、ジャパントイムズ、東京。

- 松浦伸和 (1988) 「冠詞の効果的指導法」『英語教育』11月号、22-33、大修館書店、東京。
- 水野光晴 (2000) 『中間言語分析－英語冠詞習得の軌跡』開拓社、東京。
- 織田稔 (2007) 『英語表現構造の基礎』風間書房、東京。
- 織田稔 (1990) 『英文法学習の基礎』研究社、東京。
- マーク・ピーターセン (1988) 『日本人の英語』岩波書店、東京。
- Parrish, B. (1987) "A New Look at Methodologies in the Study of Article Acquisition for Learners of ESL," *Language Learning*, 37, 361-387.
- 高橋俊章 (2010) 『教育文法的観点による日本人英語学習者への冠詞指導』、溪水社、広島。
- 高見健一 (1982) 「中学生の冠詞習得と ERRORS」『英語科教育研究』93-101、梅花女子学梅花短期大学。
- Thomas, M. (1989) "The acquisition of English articles by first-and second-language learners," *Applied Psycholinguistics*, 10, 335-55.
- 遊左典昭 (2007) 「第二言語習得における冠詞の個別性と普遍性」『英語と文法』241-253、開拓社、東京。